

解 答

一 問一 ア 暮（らす） イ 適応 ウ 客観 エ 悲喜

問二 「私」の暮らすヴェネツィア近郊には日本人が少なく、イタリア文化の中で日常生活を送らざるをえない。子どもたちに、「文化」を背景に伴った「言葉」を教えたいという考えをもった日本人同士が集まることは、生活に密着した習俗や、日本人としてのメンタリティーにいくらかでも触れさせる機会として貴重だったから。

問三 (1) ダリオが、一人で本が読める姉に影響されて、誰に教えられたわけでもないのに、自力でひらがなどカタカナが読めるようになったこと。

(2) ちょうど文字に興味をもち始めた時期に、日本の幼稚園で過ごす機会をもったうえ、一人で本が読める姉がうらやましく、自分も姉に負けたくないという気持ちが学ぶ意欲となったから。

問四 『そんなものしてない』とは言えないの。ものっていうのは、動作には使えないの。そんなことしてないよ、って言いなさいよ。

問五 イタリアで育つ安奈とダリオに、母親の母国語である日本語を教えることには苦労もあるが、驚きや発見、喜びもまたある。「私」はそうして過ごす日々を楽しんでおり、二つの母国語を身につけながら成長していく二人の姿をいとおしく、いじらしく思っている。子どもたちに日本人としてのメンタリティーが伝わっていることを感じながら、イタリアと日本の二つの文化の間で、子どもたちの心がどう育ち、花開いていくのか、楽しみに思っている。

二 問一 うさぎを受けいれた「ぼく」は本物の「ぼく」になろうとしている。が、等身大のうさぎなどこの世にありえないもので、一緒にしゃぐ「ぼく」もまた、いってはならないものである。それらを認め、受けいれると、これまで自分がつくりあげてきた価値観や常識をくつがえすことになる。「みんな」は、自分で見たことを打ち消し、「ぼく」すらも存在しないものとみなして、自らをあざむいてでも世の中でうまくやっていくための偽りの自分を守ろうとしたのである。

問二 「ぼく」にとって名前や記憶や家を持つことは当たり前で、そうしたものにしがみつき、また、守られながら生きている。しかも「ぼく」は、両親とうまくやっていくために理想の少年を演じ、自分を偽ってきた。それに対し、うさぎは「なにもいらない」と言い、自分を束縛するものから解放されて、気持ちよく、また、ありのままの自分を信じて生きている。そんなうさぎの在り方に「ぼく」は驚きながらも、感動を覚えた。意志を持ち、自由に生きるうさぎに魅力を感じ、憧れる気持ちが、うさぎを美しく見せたのである。